

令和 2 年 6 月 15 日現在

機関番号：34504

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2019

課題番号：16K13478

研究課題名(和文)「自己」の生涯発達とwell-being ショートスケールによる縦断研究への挑戦

研究課題名(英文)Life-span developmental psychology of Self and well-being

研究代表者

成田 健一(NARITA, Ken'ichi)

関西学院大学・文学部・教授

研究者番号：10228091

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文):本研究の目的は成人期における自己の発達とwell-beingの関係を、2項目自尊感情尺度などショートスケールを用いて郵送調査によって横断的に検討することであった。加えて長期縦断研究を可能にさせる礎となる調査データの収集を目指した。しかし、2020年1月以降の新型コロナウイルス禍に伴う社会的状況によって、郵送調査実施が不能となった。そこで予備的研究として、Web調査を用いて長期縦断研究の基礎となる調査データを収集した。本研究は当初の目的達成は結果として不可能であったが、副次的に、Web調査の画面レイアウトによって、回答者の手抜き程度に差がないことを示し、今後のWeb調査間比較を可能にさせた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

当初目指した本研究の主目的は、コロナウイルス禍によって郵送調査が不能となった段階で潰えた。しかし代わりにWeb調査を行なうことで、2つの目的のうちの1つ 長期縦断研究を可能にさせる礎となる調査データの収集は達成することができた。今後、縦断研究におけるWeb調査の利用可能性を検討する可能性を留保できたという重要な意味を持つ。それに加えて副産物として、Web調査のデザインやインターフェースが、Web上での回答パターンに影響を及ぼさないことも示した。今後のWeb調査において、そのデザインが異なっても相互比較を可能にさせるという意味で、重要な意義があると考えている。

研究成果の概要(英文):The purpose of this study was to explore the relationship between "self" and subjective well-being from the lifespan developmental psychological perspectives with very short scales. Specifically, this study had two aims: (a) to investigate the cross-sectional relationship between "self" and well-being in the prevalence of self-reported questionnaires using mail survey, and (b) to collect the self-reported basement data for future longitudinal studies. However, COVID-19 prevented to collect the self-reported questionnaire data from using mail survey method. Thus, very short scales, such as "TISE: Two Item Self Esteem scale," were administered on Web survey method for preliminary studies. As a result, the cross-sectional relationship between "self" and well-being were not clarified at all. Instead, it was found that the Web design has no effect on participant's satisficing responses on Web survey.

研究分野：生涯発達心理学

キーワード：生涯発達心理学 自己 成人期 Web調査(ウェブ調査) 質問紙調査 超短縮版 精神的健康 2項目自尊感情尺度(TISE)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究の学術的背景として、出自も発想も異なる3つの研究の流れが存在する。第一に、研究トピック、テーマ的な観点から、成人期における自己の発達と well-being・適応の関係性についての関心をまずあげたい。Lazarus に代表される認知的評価を重視した心理学的ストレスモデル、脆弱性モデル(素因 ストレスモデル)を基に、成人期を通して発達する「自己」あるいは個人差変数が、well-being に与える関係やその影響に関心が向けられている。心理社会的な適応に向けて「自己」を発達させることについての興味や関心の高まりと言い換えることができよう。

第二に、研究の方法論的観点から、心理学におけるショートスケール(超短縮版尺度)の利用可能性について言及したい。近年、欧米を中心に、Robins の単一項目自尊感情尺度などショートスケールと言えるいくつかの心理尺度が開発され、注目を浴びている。わが国においても筆者らの2項目自尊感情尺度(TISE: Two Item Self-Esteem scale)の開発などを代表に、簡便さに伴う利用場面、対象の広がりなどの点からも、徐々に実証研究が進められてきている。そしてこうした超短縮版を利用した実証研究が待望されている。

第三に、研究デザインの観点から、長期縦断的検討を可能とさせる礎になるベースラインデータの収集についての需要についても指摘できよう。Baltes のベルリン加齢研究、Schaie のシアトル縦断研究に代表される長期縦断研究により、身体機能、知的機能、認知機能、性格などを中心に、人の生涯発達と適応の因果関係の検討がなされている。言うまでもなく、大規模調査には多くの経済的、人的、時間的な費用を必要とする。因果関係に言及することができる長期縦断研究に対して多くの研究者の関心は高いものの、そうした様々な費用の点で二の足を踏まざるを得ない状況がある。これを何らかの方法で乗り越える可能性について、模索されてきている。

以上3点が、本研究の学術的源泉である。本研究はこれらを止揚し統合する実証研究となることを目指したい。

2. 研究の目的

本研究は、大きく以下の2つの目的を持つ。

1) 成人期(青年期・中年期・老年期)における自己の発達と well-being、並びに個人差変数の関係を、包括的に測定可能なショートスケール(超短縮版尺度)を用いて横断的に、郵送調査によって検討することである。

2) 研究テーマとしての上記1)に示す検討課題について、長期縦断的に研究することを可能にさせる礎となる調査データを収集することである。

つまり、成人期(青年期、中年期、老年期)を対象に、自己の発達と心理的 well-being に関わる諸要因を考慮し、ショートスケールを活用した調査を行なうことで、これらの目的を達成したいと考えている。

これらの目的を達成するために本研究ではまず、近年の学術研究においてもしばしば利用されるようになってきた Web 調査を用いた予備的調査を2つ行ないたい。というのも、Web 調査によるデータは回答者の回答態度・姿勢などに問題があり、データが毀損されている可能性が指摘されている。もし Web 調査という回答手続き・方法によって、いわゆる手抜き回答が生ずるのであれば、その画面レイアウトが問題であるのか否かをまず確認しておきたいと考えた。そのため、予備調査では、同一の調査項目で構成されているが Web 調査画面の見た目が異なる2つの調査を施行し、手抜き回答傾向に差異が生まれるか否かを検討したい。調査結果が毀損されるというような問題があったとしても、Web 調査を行なう方法 画面レイアウトやデザイン

によって、その毀損の程度が等しいものであるのならば、今後は Web 調査という方法さえ同じであれば、そのデザイン上の違いそのものの問題は考慮しないで済むと考えた。

次に、上記2)の目的を達成するために、Web 調査によって収集されたデータが、長期縦断的に研究することを可能にさせる礎となる調査データになり得るかどうか、実査することによって検討したいと考えた。このような2つの異なった性格をもつ予備調査を実施することによって、本研究目的の達成に貢献したいと考えている。

3. 研究の方法

結論から先に述べるならば、本研究では目的1)を達成するための郵送調査を実施することが、残念ながらできなかった。わが国の成人期の対象者に利用可能なショートスケールの収集、整理に存外に時間を要してしまい、実査が遅れてしまったことが原因の一つとなる。その遅れに起因し、調査時期が2020年1月以降となってしまった。この調査時期が、調査が不能となる根本的な原因を生み出した。2020年1月後半以降の新型コロナウイルス禍である。

本研究では、言うまでもなく、測定時期に由来する社会・環境的な影響は最小限に保ちたい。しかしながら、今般の新型コロナウイルス禍では、日常生活を含め、人の適応のあり方に大変大きな影響を与えた。それらは本研究からは当然排除すべきであると考え、当初、しばらく調査実施を見合わせた。しかし状況は全く好転せず、痛恨の極みであるが、通常の郵送調査実施が結果として全く不可能となってしまった。

このため本研究においては予備調査と位置づけた Web 調査のみを実施し、中年期・老年期の実証データの一部を得ることとした。郵送調査を実施できなかったことは、極めて残念ではあるが、予備的な調査であるこの Web 調査を、将来の縦断研究の礎として機能する可能性を留保させることで、2)の目的の一部を達成したい、と考えた。

さて、予備調査は目的の項に示したように測定時期や調査参加者が異なる2つの調査で構成される。以下、それぞれについて示す。

3.1 予備調査1

【調査日時】 調査時期は2019年3月であった。

【調査参加者】 調査対象者は、調査を委託した調査会社に登録する20歳以上80歳以下の調査モニタである。各種の調査に関して、調査会社を通して事前に同意を得ている対象者であった。なお、わが国の性別・年齢群別の人口動態に相応するよう、調査対象者を考慮した。予備調査1における調査Aでは男性264名、女性284名、計548名が参加した(平均年齢 49.90 ± 15.66 歳)。調査Bでは男性198名、女性202名が参加し、計400名が参加した(平均年齢 50.04 ± 15.60 歳)。調査A、調査Bともに、基本的にはほぼ同質の調査対象者であると言える。

【調査手続き】 予備調査1では、特定の調査会社1社を通じて、調査への参加依頼を行なった。調査A、調査Bともに事前に説明と同意を取った上で、Web調査を行った。調査A、調査BはそれぞれWeb調査のレイアウトデザインが異なるものの、内容的には全く同一の質問項目を提示した。

【調査票】 調査票は大別して以下に示すa)~d)の4部構成であった。可能な限りショートスケールを用いた。

a)環境的変数...いわゆる基本属性(性別、年齢、居住地域・職業など)のほか、主観的環境や回答に利用したデバイス(PC、スマートフォン、タブレット)に関わる変数を測定した。

b)器質的・気質的変数...遺伝的、生物学的素因の影響を大きく受け、比較的变化することが少ない器質・気質に関わる諸変数を測定した。身体的特性、認知的特性、性格特性(衝動性、パーソナリティ主要5因子:日本語版Ten Item Personality Inventory TIPI-J など)であった。

c)個人差変数...適応に影響を与える個人差をもつ様々な心理的・認知的変数を測定した。具体的には、対人関係観(受容感、信頼感など)、精神的回復力を意味するレジリエンス変数(首尾一貫感覚、情動知能、楽観性/悲観性、帰属スタイル、効力感など)である。同時にwell-beingや適応の指標として、人生に対する満足度(Satisfaction With Life Scale: SWLS)や精神的健康(K6, WHO-5)なども測定した。

d)自己に関わる変数...公的・私的自己意識、自己複雑性・多様性、自尊感情(TISE)などを測定した。加えて、自由記述を用いた紙筆型投影法である5答法(WAI 技法: Who Am I テスト)実施し、自発的自己を測定した。

これら諸変数に加えて、以下の手続きによって、手抜き回答を指標化した。

e)手抜き回答の指標化...指示項目と同一回答を用いた。まず指示項目として、質問文の中に3箇所ほど、特定の選択肢を選択するよう指示した項目を用意し、それらへの回答が誤っていた場合に手抜き回答とみなした。本研究では、選択肢の内容を示すもの(内容指示: 全くあてはまらないを選択)、選択肢の番号を示すもの(番号指示: ここでは1を選択)、選択肢の位置を示すもの(位置指示: ここでは4番目を選択)を用いた。次に同一回答は、精神的健康の指標であるK6とWHO-5の2尺度、計11項目とパーソナリティ主要5因子を測定するTIPI-Jの10項目を用いた。前者は、精神的健康が低いとK6では得点が高く、WHO-5では得点が低くなるようスコアリングされていた。また、後者のTIPI-Jでは5つの異なったパーソナリティ特性が逆転項目を含んで測定されていた。このため、前者(K6/WHO-5)も後者(TIPI-J)も、全ての項目において同一の選択肢が選択されるということは、まず存在し得ないであろうと判断した。そこで本研究では、K6とWHO-5の2尺度、TIPI-Jそれぞれにおいて、標準偏差が0である場合に手抜き回答であるとみなした。

3.2 予備調査2

【調査日時】 調査時期は2020年3月であった。

【調査参加者】 調査対象者は、予備調査1とほぼ同様であり調査を委託した調査会社に登録する20歳以上80歳以下の調査モニタであった。予備調査2では、予備調査1とは異なる調査会社であったが、予備調査1と同様に調査に関して調査会社を通して事前に同意を得ている対象者であった。なお、ここでも予備調査1と同様に、わが国の性別・年齢群別の人口動態に相応するよう調査対象者に依頼した。ところが、後述するように男性回答者数がやや多くなった。Webを介して調査を行なうという調査の性質上、男性回答者の方が多くなる傾向はこれまでの諸研究においても見られがちである。予備調査1においても、若干ではあるが、調査Aでは男性の方が回答者は多かった。結果として、予備調査2においては、男性1710名、女性1337名、その他1名、総計3048名が参加した(平均年齢 50.51 ± 14.70 歳)。予備調査1と異なる調査会社を通しての調査であり、男性回答者が若干多いという特徴はあるものの、基本的には予備調査1の調査対象者とほぼ同質であると考えられる。

【調査手続き】 予備調査2では、上述したとおり予備調査1と異なる特定の調査会社1社を通じて、調査への参加依頼を行ない、予備調査1と同様のWeb調査を行った。なおWeb画面のレイアウトデザインは、予備調査1の調査Aとほぼ同じであった。

【調査票】 調査票は、一部項目を入れ替えたが、予備調査1と類似した項目で構成した。

4. 研究成果

既に述べたように、予備調査2は縦断調査データとして機能させることに主眼がある。当然ながら、その成否は現段階では示すことが不能となる。このため、本報告では予備調査1の結果に

ついて詳述することとしたい。

4.1 予備調査 1

調査 A, B, 2 つの画面レイアウトにおける手抜き回答傾向を表 1 に示した。概して, 2 つの画面レイアウトにおける手抜き回答傾向の違いは認められなかった。統計学的にも, カイ二乗検定を行なったところ, 全ての指標において有意な違いは認められなかった (ボンフェローニ法による有意水準調整済: 内容指示 $\chi^2 = 0.69$; 番号指示 $\chi^2 = 0.30$; 位置指示 $\chi^2 = 7.43$; 指示 1 つでも $\chi^2 = 0.64$; 指示 2 つ以上 $\chi^2 = 1.22$; 指示すべて $\chi^2 = 4.73$; 同一 K6/WHO-5 $\chi^2 = 1.72$; 同一 TIPI-J $\chi^2 = 0.25$; 同一 1 つでも $\chi^2 = 0.12$; 同一すべて $\chi^2 = 3.06$; 指示・同一 1 つでも $\chi^2 = 0.39$, すべて $df = 1$, n.s.)。同様に, 回答に使用したデバイスとしてパソコンを選択した者 (調査 A: 358 名; 調査 B: 240 名) とスマートフォン・タブレットを選択した者 (調査 A: 186 名; 調査 B: 160 名), それぞれに分けて検討しても, 2 つの画面レイアウトにおける手抜き回答傾向の違いは全ての指標において認められなかった (パソコン: 内容指示 $\chi^2 = 0.07$; 番号指示 $\chi^2 = 0.16$; 位置指示 $\chi^2 = 2.38$; 指示 1 つでも $\chi^2 = 0.17$; 指示 2 つ以上 $\chi^2 = 0.28$; 指示すべて $\chi^2 = 1.57$; 同一 K6/WHO-5 $\chi^2 = 4.19$; 同一 TIPI-J $\chi^2 = 1.14$; 同一 1 つでも $\chi^2 = 0.69$; 同一すべて $\chi^2 = 7.82$; 指示・同一 1 つでも $\chi^2 = 0.01$, スマートフォン・タブレット: 内容指示違反 $\chi^2 = 0.93$; 番号指示違反 $\chi^2 = 0.16$; 位置指示違反 $\chi^2 = 5.14$; 指示 1 つでも $\chi^2 = 0.56$; 指示 2 つ以上 $\chi^2 = 0.87$; 指示すべて $\chi^2 = 4.06$; 同一 K6/WHO-5 $\chi^2 = 0.73$; 同一 TIPI-J $\chi^2 = 1.07$; 同一 1 つでも $\chi^2 = 1.05$; 同一すべて $\chi^2 = 0.78$; 指示・同一 1 つでも $\chi^2 = 0.73$, すべて $df = 1$, n.s.)。したがって本研究の範囲では, 回答デバイスによって手抜き回答のパターンが異なるわけではないということが示された。

なお Web 調査と郵送調査を比較した場合, 従来の研究では全指標において Web 調査での手抜き回答は有意に多くみられている。このことから, Web か紙筆かという回答方法の違いが回答態度・姿勢に影響を与えるが, 調査画面のレイアウトは回答態度・姿勢にあまり関係していないと言える。今後は, なぜ Web 調査においてのみ比較的悪い回答態度・姿勢となってしまうのか, つまりなぜ Web 調査では注意資源の節約が生じやすいのか, について検討する必要がある。

最後に, 本予備調査 1 の範囲では, Web 調査間での比較においては, インターフェースが異なっても, そのまま比較することが可能であると言えることが示された。したがって, 本予備調査 2 で得られる研究結果を他の研究結果と直接的に比較することが可能であると結論づけることができるだろう。

4.2 予備調査 2

先に述べたように, 予備調査 2 に関しては, 縦断調査データとして今後, 機能させることに主眼があるため。ここでは詳述することができない。今後, さらに分析を進めたい。加えて, 本来はそもそも測定する予定であった郵送調査のデータ収集を将来的に行なうことで, Web 調査, 郵送調査, 両者の結果の比較などを行なうことができると考えている。また予備調査 1 で示したように, 予備調査 2 の研究結果を他の Web 調査と比較することも今後の課題となる。

表 1 画面レイアウトの異なる 2 つの調査における手抜き回答傾向

	指示						同一				指示・同一 1 つでも
	内容指示	番号指示	位置指示	1 つでも	2 つ以上	全て	K6/WHO-5	TIPI-J	1 つでも	全て	
調査A	27.9%	23.0%	9.1%	30.7%	23.0%	6.4%	5.3%	8.4%	9.7%	4.0%	31.4%
調査B	25.5%	21.5%	4.5%	28.8%	20.0%	3.3%	3.5%	7.5%	9.0%	2.0%	29.5%

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 箕浦有希久・成田健一	4. 巻 68(1)
2. 論文標題 状態自尊感情の日記法研究	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 人文論究	6. 最初と最後の頁 151-173
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） http://hdl.handle.net/10236/00026931	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 箕浦有希久・成田健一	4. 巻 43
2. 論文標題 自尊感情の複数回測定とその展望 測定方法と研究目的に注目して	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 関西学院大学心理科学研究	6. 最初と最後の頁 11-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） http://hdl.handle.net/10236/00025792	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 高橋伸彰・成田健一
2. 発表標題 Web調査における画面レイアウトの違いは回答姿勢に影響を与えるか？ 同一の調査項目を調査会社1社のモニタに施行して
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 成田健一（著）・松田修（編著）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ワールドプランニング	5. 総ページ数 234
3. 書名 最新老年心理学（第12章 高齢者のパーソナリティ）	

〔産業財産権〕

[その他]

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	箕浦 有希久 (MINOURA Yukihisa)		
研究協力者	高橋 伸彰 (TAKAHASHI Nobuaki)		